

新しい地球倫理を問う

服部 英二

キーワード…地球倫理、母性原理、生命の文明、互敬

初めに

二〇一一年三月、日本を襲った未曾有の大震災は、圧倒的な津波の恐ろしさに加え、制御不可能な原発という怪物が末代の世まで残すことになった、目に見えぬ放射能の恐怖により、天災ではなく、人災であった、との思いを万人の胸に刻みつけた。「自然を支配し制御する」という近代的思想に立脚した現代文明そのものの根本的な誤謬が、白日のもとに曝されたと言ってもよい。

われわれは文明の危機に直面している。このことは、とりもなおさず、今まで「文明」と信じてきたものが、実はいびつな文明であったと知る重大な反省を促すものであり、もし人類が存続を欲するならば、今や、文明の本質に対する真摯な再吟味こそが、緊急の課題として浮上してきていることを意味する。

筆者が会長を務める地球システム・倫理学会は、討議を重ねた結果、東日本大震災の一カ月後を期して次

のような「緊急声明」を日・英・仏の三カ国語で世界に発信した。

地球システム・倫理学会緊急アピール

国連倫理サミットの開催と地球倫理国際日の創設を訴える

地球システム・倫理学会会長 服部英二

世界が直面する危機は経済危機でも金融危機でもなく文明の危機であり、その解決には人類の叡智の地球規模の動員が必要とされます。

このたび日本を見舞った未曾有の大震災と津波による数十万人の生命線の破壊、更にそれが惹起した福島原発事故は、日本のみならず世界に人間の生き方の変革を迫る「母なる大地」の警告にほかなりません。

「自然を統御し支配する」という一七世紀以来の科学文明は、破局に人類を向かわせる「力の文明」であり、理性至上主義の父性原理に基づくものでありました。今やこれを、命の継承を至上の価値とする母性原理に基づく「いのちの文明」へ転換すべき時です。このパラダイム転換こそが、すべての民族が、そして人間と地球が共生する「和の文明」を築く基盤であります。諸文明に通底する倫理とそれに

基づく人の絆を築き、未来世代が美しい地球を享受する権利を尊重する新しい文明の創設が待たれます。

日本はついに軍事・民事の双方で原子力の犠牲国となりました。日本は国際社会に核廃絶を訴え続けてきました。当学会としては、日本は今や自国のみならず世界が、エネルギー問題においても、脱原発に舵を切ることを訴えて行く責務を負うに至ったと確信します。この責務を果すことこそ今回の不幸を無駄にしない唯一の世界への貢献であると信じます。

人類が直面する危機の根深い原因は世界的に蔓延した倫理の欠如であります。未来世代に属すべき資源を濫用枯渇させるばかりか、永久に有毒な廃棄物及び膨大な債務を後世に残すことは倫理の根本に反します。市場原理主義による篡奪文明からの脱却が急務であります。

このような状況を前にして、本学会としては、一日も早く国連倫理サミットを開催し、「地球倫理国際日」を創設することにより、毎年倫理の重要性に思いを馳せる機会とすることを国際社会に提唱するものであります。

平成二三年四月一日

学会事務局 E-mail: ntatiki@reitaku-u.ac.jp

この呼びかけに対する世界からの反応は期待を上回る熱烈なものであった。すでに数十カ国の識者が、自らのウェブサイトにこの声明を転載、更に中国語・ドイツ語版制作の申し出もある。日本政府による浜岡原発の突然の停止決定も、この声明と無関係ではない。地球と人類の未来を真剣に考える人びとの連帯の輪は、着実に拡大して行くであろう。

母殺しの大罪

「人類は母なる大地を殺すのであろうか？ もし、仮に母なる大地の子である人類が母を殺すなら、それ以後生き残ることはないであろう」と、アーノルド・トインビーは、その遺書とも言える著『人類と母なる大地』(*Mankind and Mother Earth*)の中で述べている。人類誕生以来の六〇〇万年の悠揚たる時間から見ると、その二万分の一という、まさしく瞬間に等しい時間帯に、人類は母殺しの大罪を犯そうとしていると、この碩学はその最晩年に警告しているのだ。そしてそれと共に人類は自らその歴史に幕を下ろすことになるう、と。

トインビーの警告は切実である。この三〇〇年間で、すでに地上から大半の森が姿を消し、気候温暖化はあと二度の上昇で、現存の生態系の崩壊という後戻りのできない一線を越す。生物多様性はエコシステムを保つのに必須の要因であるのに、毎日実に一〇〇種以上の生物が地上から姿を消してゆくのだ。しかもそれは年々加速している。大宇宙に奇しくも生まれた水の惑星では、水が万象の調整役を務めて来たのである

が、温暖化で氷河が溶け、神々の住むヒマラヤの雪まで溶けた暁には、川は細り、砂漠は更に拡大し、洪水と暴風の規模は数倍に膨らむと予想される。あとたったの二〇年で二〇億人が飲み水にも事欠く事態が到来する。化石燃料の発見以来人口爆発が起こったのであるが、過去一世紀だけでも四倍した人口は、二〇五〇年には九二億に達し、そこからは減少に転じる、と言われている。しかしその減少は、平和裏に行われるのではない。大きな痛みを伴った仕方では起こるほかはないのだが、そのことに思いを致す人は少ない。

この母親殺しの行為は何時始まったのか？ それは、一七世紀、ヨーロッパに科学革命が起こり、人と自然が分離された時である。およそデカルトによる「人は自然の主であり所有者である」という自然認識こそが、啓蒙主義に繋がり、一八世紀末からの産業革命を惹起した思想的根拠であるが、人間の生活に薔薇色の未来を描いたこの進歩の時代、実は物質文明の豊かさとは裏腹に、人間の内なる生は貧困化して行った。故ならば啓蒙主義とは、理性・感性・霊性という人間の能力のうち、理性のみに突出した優位を与える立場であり、人はこの時代精神の中にあつては、本来の全一的 (Holistic) な自然認識を失って行かざるを得なかったからである。

存在から所有へ——精神の砂漠化

これをわたしは「精神の砂漠化」と呼ぶ。この事を理解するには、この時から人びとの関心が急激に「存在」Etre⇒to beから「所有」Avoir⇒to haveに移ってゆくことに注目せねばならぬ。人の価値はその人の人格・精神性、すなわち内なる生ではなく、その人が何を持っているか、という外なる生によって計られることとなった。大きな屋敷・財産・権力と言ったものである。所有の拡大が「進歩」と呼ばれた。そして植

民地主義はこの所有の価値観を全地球空間に広げたものであり、必然的な到達点であった。それは科学技術の開発によって列強となった西欧の近代的民族国家が、更に強力な覇権を求めて、「奪い合う」ものであった。そこでは人による自然資源の篡奪が、未開人すなわち人以前の存在とみなされた先住民を酷使する仕方で行われた。本来、地球という水の惑星が育んできた大いなる生命系の中に位置する人類は、この時以来、人——それは厳密には理性的存在としての欧米人のことであつたが——以外の他のすべてを支配の対象とし、母なる地球を、そしてその母が育んできた生きとし生けるものを自らの「進歩」の名のもとに篡奪し、支配してきたのである。これが「文明」と呼ばれた。文明とは、そのため必然的に西欧的、理性的、男性的なものであつた。言いかえれば、その文明とは「力の文明」であり、「父性原理」に基づいたものであつた。

聖書による正当化

これをキリスト教の教えに適うものとする議論もある。それは「創世記第一章」に次のような記述があるからである。「光あれ」の言葉と共に天地を創造した神は、六日目になって土くれに息を吹き込みアダムとイヴ二人間を創る。その時の神の言葉は、「産めよ、増えよ、地に満てよ。地を従わせよ、また、海の魚と、空の鳥と、地に這うすべての生きものをおさめよ。」である。これは「進歩」を標語とした一九世紀には誠に都合のよい聖書の記述であつた。今では考えられないであろうが、「黒人も（神の創つた）人であるのか？」と言うことが、植民地主義の謳歌した一九世紀から二〇世紀初頭に至るまで真面目に議論されたのである。

しかし、この聖書を根拠とする進歩論には、三つの欠陥があつた。一つは母なる大地の資源は無尽蔵であ

るといふ根拠なき前提に立っていたこと、二つ目は、この進歩論は直進する時間論を持つヘブライ・キリスト教の世界観に立脚するものであるが、この時間論は終末論を内包することを失念していたことである。そして三つ目は、聖書に記されたこの神の言葉を根拠としながら、実はその神自身を、進歩を説く科学主義は殺してしまふ、という矛盾を犯していることである。

科学革命の時代、人間は自然を対象と見做すことにより、自然から自らを分離する。すなわち自然と離婚する。しかしその時、同時に神とも離縁していることに注意せねばならない。Cogito ergo sum 「われ思う、ゆえにわれあり」とは、デカルトの思想を集約する言葉とされる。ここに確立したのが近代的自我、コギトの主体としてのEgoであった。そこにもはやヘブライキリスト教の神はいない。デカルトの目、すなわちデカルトの理性こそが神の目であった。何故ならば、それはすべての存在を疑いぬき、他人の存在さえも疑った末に確立した孤独な我であり、自己以外の世界のすべてを対象として見るその目は、まさしく超越者、すなわち世界を外から見る創造主の目であったからだ。

「神は死んだ」

一九世紀、ニーチェは「神は死んだ」と告げるが、ニーチェが神を殺したのではない。かれは「死んでいた神」を発見したのである。この神とはあくまでもキリスト教の神であるが、キリスト教を精神基盤とするヨーロッパにおいてその神殺しは行われたのであった。

本論では、先に人類の母殺しを語ったが、それと同時に父殺しがおこなわれたことを語らねばならぬ。ヘブライ・キリスト教的神は「天にましますわれらが父」であるからである。したがって、科学革命とは、ヨ

ヨーロッパで犯された「両親殺し」の行為であった、と言ってよい。ヨーロッパは自らを生みだした両親、すなわち母なる大地と父なる天の神の双方を、この時同時に消し去るのである。ニーチェは神の死を告げたが、神の座が残った。その神の座に就いたのが近代的人間であった。

このような動きは実はルネサンス期にすでに始まっているが、一七世紀から一八世紀にわたって続けられたこの聖俗の抗争の意味を更によく理解するには、ここでヨーロッパの誕生と、キリスト教との出会いが作り出した中世という時代を振り返らねばならない。

ヨーロッパの出自

ヨーロッパというこの特殊な地域の出自を問うてみよう。それは、ギリシア神話によれば、ゼウスがフェニキアの王女エウロペ (Europa) にひと目惚れし、牛に姿を変えて誘惑するところから始まる。エウロペを背に載せたゼウスは海を渡り、クレタ島に至り、彼女はゼウスの子、ミノスをもうける。ミノア文明のはじまりである。この神話には地中海の交流が描かれ、ギリシア文明そのものがオリエント、エジプト、エーゲ海文明と深く結び合っていることがわかる。しかしながら近代になってこの神話の意味は忘れ去られ、ギリシアはロゴス(理)、すなわち近代的理性の故郷として描かれることになる。かつては「光は東方より」と崇められたオリエントの影響は、ロゴス性の欠如、そのミュトス(神話)性のゆえに軽蔑され、極力排除されてゆく。その結果教科書の中では、まことに美しいギリシア文明が、まるで地中海の泡から生まれたヴェーナスのように、突如として出現することになった。その輝かしい文明の後継者がローマである。

ローマは「ガリア戦記」の方向に拡大し、帝国となるが、そこには四世紀大きな精神的転機が訪れる。す

なわちそれまでの文化とは全く異質な文化的価値であるキリスト教の公認である。キリスト教の母体であるヘブライズムすなわちユダヤ教は砂漠の宗教である。それが海と緑のヨーロッパに持ち込まれることとなったのだ。それは極めて異質なものの合体という一大事件であったと言える。不条理なるもの (Credo) が条理 (Ratio) の社会において合成され、しかも上位の価値に位置付けられるということが起こったのである。

この合成は、実はイエス・キリストがヘブライズムの中で成し遂げた精神革命のお蔭で可能になったのであった。ユダヤ教の核心は「選民思想」であるが、イエスはそれを退け、救済の対象を「万民」に広げた。次に神の本質をユダヤ教の「怖れ」ではなく、「愛」であると、一八〇度転換したのである。この革新により、キリスト教は世界宗教となり、かつてのシーザーの道をたどって、ローマからローヌ河を北上、やがてヨーロッパのすべての地に根付いてゆく。

ヨーロッパ中世の歴史は、このギリシア的理性Ⅱロゴスと、ヘブライ的靈性Ⅱトーラの習合の歴史であると言ってよい。合理と不条理の合体であり、学と信の止揚である。それが頂点に達したのがスコラ哲学に他ならない。

ヨーロッパの中核としてのスコラ哲学

一二世紀にすでにアベラール等はその萌芽をみるスコラ哲学は、一三世紀、パリはソルボンヌに各国から集まっていたトマス・アキナスを中心とする学究たちによってその頂点を迎える。その直前、イベリア半島のトレドの図書館でアラビア語からラテン語に翻訳されたアリストテレスの著作の全貌が明らかにされ、そ

れが直ちにソルボンヌにもたらされたのであった。ちなみにこの翻訳には、キリスト教徒の他、ユダヤ人とイスラームの民ムーア人の協力があったことも付記しておきたい。トマスはこの新たに到来したラテン語版アリストテレスの自然学と形而上学を縦横に駆使し、アウグスチヌスをはじめとする教父神学の下敷きの上に壮大な知のカテドラルを構築した。それが *Summa Theologiae* (神学の集大成) 『神学大全』、のちにカトリックの「黄金の知」と呼ばれたものである。しかし、理と信という、この水と油のように相いれないものの合成は、やがて再分離してゆく運命にあった。あたかも卓上に置かれたドレッシングが、時間と共に酢と油に分離してゆくように。その分解の時、中世の黄昏がおとずれる。

中世の黄昏

中世末期、ヨーロッパを襲った黒死病と貧困は、中世の社会に壊滅的な打撃を与えた。ここに異端審問と魔女狩りの悲惨な一ページがひらかれる。平野啓一郎が、いみじくも『日蝕』に描いた世界である。そして、そこから二つの動きが現れることとなる。一つがルネサンスであり、もう一つが宗教改革である。これを図解すると次のようになる(図1)。それは中心に二つの線が交差する円を持つX型を描く。この中心こそがスコラ哲学であり、ヨーロッパの核である。もともと異質であったものが、このスコラ哲学によって見事に合成されたかに見えたのだが、それは長くは続かず、ギリシア的ロゴスすなわち「理」はルネサンスによって再発見され、やがて科学主義を生み出すものとなる。もう一方のヘブライ的靈性あるいは「信」の追求は、ルターやカルヴァンの宗教改革となる。合成体からの再分離、源泉への復帰という意味で、宗教改革は優れて原理主義の運動であった。もう一方の理性の再発見が科学至上主義というもう一つの原理主義を生

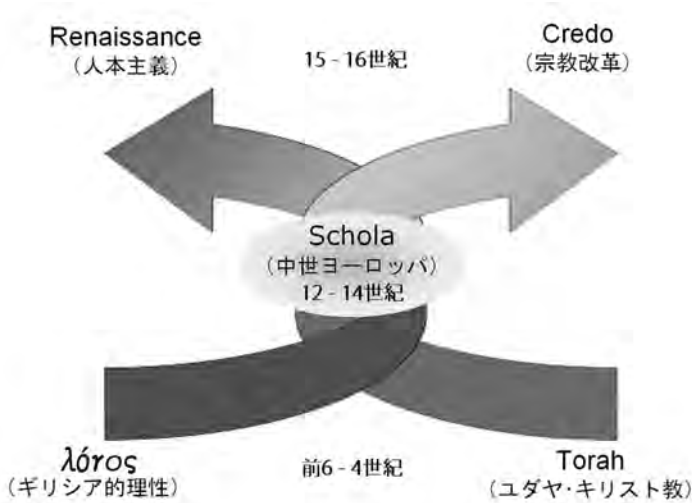


図1 ヨーロッパの概念図

んで行くように。

ルネサンスは何をもたらしたか？

ルネサンスを「文芸復興」と訳すことには意味がない。それはあくまでもギリシア的理性の再発見であり、人間宣言であった。人本主義としての Humanism である。この時、人は神に見られる存在であることをやめ、神を見る存在となる。神さえも「対象」となる。システイーナ礼拝堂でミケランジェロの絵画を見るがよい。キリストさえも人間的に、父なる神さえも老人のように描かれている。新しい教皇を選出するコンクラーベが行われる聖なる場、名作中の名作と言われる絵画に囲まれたこの空間、これはもはや人間の殿堂であり、神の殿堂ではない。聖書の登場人物たちはギリシア神話の主人公たちと同じ扱いを受けているのだ。

上述したように、イスラーム世界とアラビア人のお蔭で一二世紀ルネサンスを体得し、古代ギリシアの科

学的理性を再発見した西欧は、パリのソルボンヌを中心に、一三世紀、スコラ哲学という極めて理性的な神学、すなわち第一哲学を完成させたのであるが、そこで培われた科学的理性は、一五世紀以来、自然科学を生みだして行った。Renaissance (re nature 生) の語はここでその全き意味を顕わにする。ギリシアの知、エピステーメ (Scientia) とは優れて自然を科学することであったからだ。しかし自然科学の真理は必然的にもう一つの真理、すなわち教会の真理との衝突を惹きおこす。ここにあくまでも単一性を求める真理をめぐる数世紀にわたる壮絶な戦いが繰り広げられるのだが、このことが、多くの人の記憶からは消し去られている。

聖俗の葛藤から生まれた科学革命とその非倫理性

一七世紀、地動説の正当性を説いたガリレオの教会による断罪を知ったデカルトは、彼自身の言うところを借りれば「仮面をかぶって歩み出る」。すでに書きあげていた自らの名著「Traité du Monde」(『世界論』)を封印、教会用語を巧みに使った「第一哲学 Prima Philosophia」の名のもと『省察』Meditatioを書き、神の存在を立証するとしつつ、キリスト教的人格神を葬り去る。それがバスケルをして「デカルトを許す」とはできない」と言わしめたものである。

この教会の真理と自然科学の真理をめぐる葛藤を抜きにしては、ヨーロッパの近代は語れない。教会の真理とは「神の国」のみならず、「三位一体」、「処女の懐胎」、「復活」といった科学的には不条理とされるものを含み、ヨーロッパは長らく二重真理説でこれを切り抜けてきたのであった。つまり価値を問う真理は教会に、価値を問わない真理は科学に属すると言う棲み分けである。端的に言えば、「真理は科学、倫理は教

「会」という責任分担である。これが実は近代科学の性格を決定することとなった。すなわち「科学は価値を問わず」(Value free)とこう立場である。注意すべきは、このとき生まれたこの非倫理の立場こそが、ついには化学兵器や原爆という極めて非人間的な兵器の開発に繋がってゆくことである。

問題は、したがって、近代科学の内包する根本的な非倫理性にある。

近代科学は中世の黄昏に始まった教会との数世紀にわたる熾烈な戦いに勝利したことにより、鎖から解き放たれた鳥のように、また、発射台の上で点火されたロケットのように、ヨーロッパというこの一神教の地から発射されたのであった。これが科学革命であるが、それが神の死と密接に関わっていたことを忘れてはならない。啓蒙主義の到達点としての一八世紀末のフランス革命は、王権だけでなく、教権も葬り去った。「人權宣言」には神は存在しない。それは人と人との、更に言えば市民同士の約束である。

七つの大罪

真理と倫理の棲み分けの一方が破綻した時、哲学者たちが一様に問うたのは次の問いであった。「神なくして道徳は可能か？」これがデカルトにあっても、カントにあっても根本的な問いであった。

近代科学が物質文明を進化させ、医療や通信の改良に大きく貢献したのは確かだが、それ以上に人間の存在と反比例する所有慾を増大させるものとして発展したことに注意すべきであろう。戦争は科学の飛躍的進歩の親となった。そして資本主義の確立がそれを更に助長したのである。それは今や市場原理主義となり、金融工学という犯罪的手法によって、地上の貧富の差を日々拡大させているのみならず、母なる大地の資源篡奪により、このかけがえのない地球を破滅の寸前まで追い詰めるものとなった。

所有は更なる所有への慾を生みだす。ユネスコの報告書『地球との和解』で、かつての国連事務局長ハビエル・ペレス・デクエヤルは、こう述べた。

「人類が現在罹っている病の原因は『過剰』にあるのであり、『足るを知る』という先賢古聖のいさめを忘れてしまったことだ。」

今、自由の美名のもと、人類は七つの大罪を犯している。マハトマ・ガンディーの言う社会的七つの大罪である。それは、理念なき政治・労働なき富・良心なき快樂・道徳なき商業・人間性なき科学・人格なき教育・犠牲なき宗教である。

そのガンディーはまた、こう言っているのだ。

「世界にはすべての人の需要 (need) を満たすだけの資源がある。しかしすべての人の貪欲 (greed) を満たすだけの資源はない。」

新しい地球倫理とは？

文明の本質を問う時、今念頭におくべきは、この近代科学の生い立ちである。それは信仰との闘争の産物であり、人の全人性をゆがめた理性至上主義に基づくゆえに、文化の多様性と他民族の尊厳を認めぬ覇権主義であり、力の文明であった。それを「父性原理」と呼べば、その対極に位置し、今まで未開と軽んじられてきたものの中にこそ、未来的倫理が見出せるのではないか、とわれわれは考える。それは理性・感性・霊性のすべてを和する「母性原理」であり、全人性の倫理である。その母性原理とは、いみじくも鶴見和子が言いきったように、「いのちの継承を至上の価値とすること」である。

翻ってみれば、父なる神を持ち、やがてそれと戦ったヨーロッパにも、かつては母性原理を生きた時代があった。ケルト文化がそうである。エーゲ海文明もそうであった。そこには大地母神 (Magna Mater) が生きていた。ルネサンスに現れる聖母崇拜は実はこの地母神の復活であったと見ることもできる。そうすると科学革命を生んだヨーロッパの根底には、縄文文化を有した日本から韓国、海の中国、インドシナ半島からインドネシアに至る「豊穡の三日月地帯」が共有する「循環するいのち」の文明と通底するものがあるのだ。だからこそエコロジーもここに生まれた。

しかしながら、明日を思わず、今日の利益を求める市場原理主義は、未来世代に思いを致すことなく経済的成長を求めて止まない。限らない欲望の追求が「自由」の旗印のもとに推し進められている。それはあくなき所有の拡大であり、人間の内的成長とは無関係なのだ。この市場原理主義こそが全世界に格差を増大させ、紛争の種をまき散らしている覇権主義の正体であり、これを終焉させることこそが人類の明日の共生を可能にする条件である。

希望はエコロジーを生んだ西欧の持つ復元能力である。ヨーロッパの歴史を見ると、振り子運動のように絶えず自己批判を行う動きが見られる。例えば理性至上主義の時代にあつて、それと対峙してバランスを取るかのように生まれたのが、バロック様式やロマン主義であった。

結論

われわれが知るべきは、地球の砂漠化は人間の心の砂漠化から招来した、ということだ。地球システムを救うには、今こそ新しい倫理が問われなくてはならない。すなわちパラダイムの転換が必須であるとわれわ

れは信じる。その新しい地球倫理の確立のためには、近代の所有の文化を生み出した理性至上主義すなわち「父性原理」の徹底的な批判、すべての文明の深奥に通底する「母性原理」の見直しが行われなければならない、とわれわれは信じる。「力の文明」から「生命の文明」への転換である。「戦争の文化」から「平和の文化」への移行である。

しかし、その際もつとも注意すべきはバランスである。それは単なる理性の否定であってはならない。人類には父母の双方が必要なのである。われわれの追求する「通底の価値」すなわちすべての民族が分かち合える未来的倫理とは、感性のみによるものではなく、あくまでも互敬の立場に立ち、感性・霊性と響きあう理性によってのみ到達可能なものと知るべきであろう。それを新しい理性主義と呼んでもよい。

世界の現状は、カントやユーゴーの夢見た「世界連邦」の成立には程遠い。しかし「地球市民」の意識の涵養は可能である。何故ならば、ミシェル・セールが奇しくも見とつたように、人間に切り裂かれた自然が、無言のうちに、人間に向かって再結集し始めているとすれば、この状況こそが全人類への「挑戦」challengeにほかならず、それへの「応答」responseが地上の全民族の連帯に求められているからである。

(本稿は、社団法人全国日本学士会会誌『ACADEMIA』No. 128 (2011. 6) に発表したものです。)